

「こんなん」 しています。

わだいのついで

— 125 —

種採り大会

ススキが風に揺れる姿は、日本人の感性に響く秋の風物詩。

晩秋の頃、ススキの穂は白い綿毛にくるまれた種をたくさんつけ、少しの風にも飛ぶ準備をします。ススキの種は風に乗り、次の芽生えのために新しい土地へと舞っていくのです。

11月下旬、ススキの種採り大会なるものに参加しました。主催はわかやま地域植物緑化研究会。緑化工事の施工業者、資材業者、研究者らによる研究会で、外国産種子を

使わず、地元の植物の種子で地域の緑化を進めようという研究会。和大的な研究者や学生もメンバーです。

道路や住宅地開発で山を掘削すると人工的な斜面である法面（のりめん）ができます。和歌山大学の近くでも、途切れることなく山を掘削しマンモス住宅地が今も開発中です。先日、その住宅街を通った時のこと。植物が繁茂し始めた法面を見て、「ああ、こども外国産の植物だ」と環境生態学者の教員はため息をつきました。

開発で裸になった法面の緑をすみやかに回復するた

つれもて とろら

めに、繁殖力が旺盛で安価な外来種や外国産在来種が盛んに導入されてきました。外国産在来種とは、ススキやヨモギのように国内に分布する在来種が、中国などで採取された種苗のこと。安価な生産体制で大量に市場流通しているため工事計画や予算が立てやすいという利点がありま

す。しかし、外国産の植物に地域固有の植物が駆逐されたり交配が起こるなど生態系を攪乱する問題が起きています。地域由来の土地に生えた植物と人間の暮らしとは密接に関係しています。地域の生態系のつながり（生物多様性）が損なわれることは、環境はもとより農林業への影響など私たちの生活、生存とも無縁ではありません。

みどりの地産地消

さて、種採り大会では、高野山森林公園内丘陵地



ススキ採集

を集めるのはとても手間のかかる仕事。一日がかりで採取しても重量はたいしたことがありません。市場流通できる量をコストに合う形で生産することが労賃の高い日本では無理なことがよくわかりまし

た。緑化工の実践的な研究者であり一流の技師でもある山田さんは研究会の目標をこう言いました。「地域の種を地域で生産し、地域の業者が、地域の緑化工事を実施すること」。

出す社会のありようです。しかし、地域の種子で生物多様性に配慮した緑化工事には、地質、気象、植物の選定、採取、発芽条件、播種機械、工法、工期、コストなど多くの課題があります。研究会はそれにチャレンジしています。

種採り大会のちらしの見出しは「T U R E M O T E T O R O R A（つれもて とろら）」。地元の種で地元の生態系を守り、地元の仕事を作ろう、と言っているのです。難問に立ち向かう泥臭い緑化システムの最高の合い言葉ではないでしょうか。



採取したススキの種

プロ
フィル



湯崎真梨子（ゆざき まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。